

城
堀
遺
跡
発
掘
調
査
報
告

城堀遺跡発掘調査報告

一〇〇三・三

2003.3

三重県埋蔵文化財センター

三重県埋蔵文化財センター

序

埋蔵文化財は、それぞれの地域における大切な過去の遺産であり、現在に生きる我々が後世に残していくなければならないものです。しかし、我々の生活が便利で豊かなものになっていく過程で、多くの埋蔵文化財がその犠牲となってきたのも否定できない事実です。今ある快適な暮らしがそれらの犠牲の上に成り立っていることを常に頭の片隅にでも置いておくことが必要でしょう。

今回、ここにご報告致しますのは、一般県道多気停車場線緊急地方道路整備事業に伴って消失する城堀遺跡の発掘調査成果であります。調査の結果、古墳時代の方形周溝墓や竪穴住居、奈良時代の竪穴住居や中世の土塁や溝など様々な遺構や遺物が確認されました。当遺跡の所在しております周辺には、コドノ遺跡や岩内城などの遺跡もあり、それらとの関連も考えられます。

今回の調査の成果が、郷土明和町の歴史を解明していくうえで、広く活用されることを願ってやみません。

なお、調査にあたっては、三重県県土整備部道路整備課や明和町教育委員会及び、地元の方々には多大なご理解とご協力を賜りました。文末ながら、深く感謝の意を表明致します。

平成15年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

本文目次

I	前言	1
II	位置と環境	3
III	層位と遺構	6
IV	遺物	15
VII	結語	20

挿図目次

第1図	遺跡位置図	3
第2図	遺跡地形図	5
第3図	調査区位置図	5
第4図	調査区平面図	7～8
第5図	調査区平面図（土壘の下）	9
第6図	調査区南壁土層断面図	10
第7図	土壘平面図	11
第8図	土壘推定復元図	12
第9図	S K 56土器出土状況図	13
第10図	S X 74土器出土状況図	13
第11図	S X 9 土器出土状況図	14

表目次

第1表	出土遺物観察表（1）	22
第2表	出土遺物観察表（2）	23

図版目次

図版1	遺跡全景	24
	遺跡全景	24
図版2	土壘の下の遺構全景	25
	S Z 65	25
図版3	S H 52土器出土状況	26
	S X 9 土器出土状況	26
図版4	出土遺物写真（1）	27
図版5	出土遺物写真（2）	28

例　　言

1. 本書は、三重県多気郡明和町上村に所在する、城堀（じょっぽり）遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は次の体制で行った。

　調査主体　　三重県教育委員会

　調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　　調査第1課　技師　　金子　智子

　主事　　筒井　英俊

3. 本書の執筆、編集、写真撮影は金子智子が行った。

4. 本書が対象とした調査面積は2,000m²である。

5. 本書が対象とした現場調査期間は、平成11年10月4日から平成12年1月26日である。

6. 本書で示す方位は、国土座標第VI系を基準とする座標北を用いた。なお磁北は約6度30分西偏している（平成9年　国土地理院）

7. 本書では、下記の遺構表示略記号を用いた。

　S H：堅穴住居　SK：土坑　SD：溝　SX：墓　SZ：不明遺構　Pit：小穴

8. 本書で表記する色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局および財団法人日本色彩研究所　色票監修『新版標準土色帖』に準拠した。

9. 発掘調査及び本書の作成に際しては、下記の方々にご指導・ご協力をいただいた。（敬称略）。

　三重県県土整備部道路整備課、松阪地方県民局建設部、明和町教育委員会

10. 本書が扱う発掘調査の原因事業は一般県道多気停車場線緊急地方道路整備事業である。

11. 発掘調査の経費は三重県県土整備部が負担した。

12. 本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、当埋蔵文化財センターが保管している。

I 前 言

(1) 調査の契機

三重県教育委員会及び三重県埋蔵文化財センターでは、国及び県にかかる各種公共事業に関して各開発部局の事業を照会し、事業予定地内にある文化財の確認とその保護に努めている。こうした中で、県埋蔵文化財センターでは、三重県国土整備部道路整備課から、平成11年度（一）多気停車場斎明線緊急地方道路整備事業にかかる事業計画の回答を受けた。

事業地内には城堀遺跡という周知の遺跡があり、平成8年12月12・13日に県埋蔵文化財センターが試掘調査を実施した。その結果、事業地内には遺溝、遺物が確認された。

この取り扱いについては、その保護に努めるよう事務所と県埋蔵文化財センターの間で協議を重ねた。しかし、現状保存が困難なため、やむなく事前に発掘調査を行うこととなった。

(2) 調査の経過

発掘調査は、平成11年10月4日から平成12年1月26日まで実施した。また、最終的な調査面積は約2,000m²であった。なお、小地区の設定にあたっては、4m×4mを基準として北から南へ数字、西から東にアルファベットの番号を与え、地区名は北西隅の杭を基準とした。

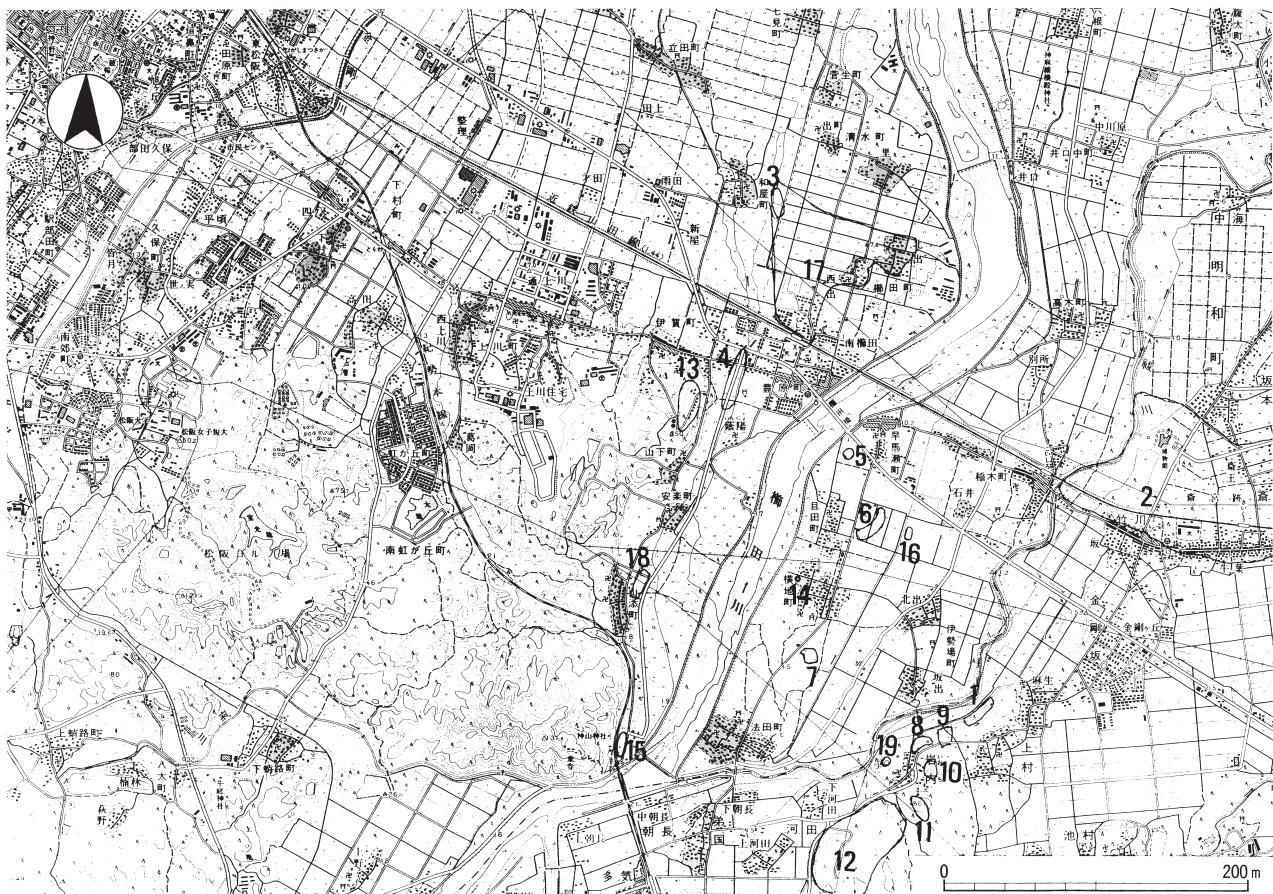
調査日誌（抄）

月 日

- 10. 8 調査区表土の重機による除去開始。
- 10. 12 調査区表土の重機による除去および、発掘資材搬入。
- 10. 13 表土除去終了。小地区設定。
- 10. 14 電話線の設置
- 10. 15 ベルトコンベア搬入。
- 10. 18 作業員による調査開始。ベルトコンベア設置。
- 10. 21 遺構検出開始。
- 10. 22 遺構検出および、遺構（SK1・2・6・8、SD3・7、SZ4・5）掘削。

- 10. 25 遺構（SD3・11、SK2・10・12・SX9）掘削。
- 10. 26 遺構検出および、遺構（SD11・14・15）掘削。
- 11. 2 遺構検出および、SD11掘削完了。
- 11. 4 遺構検出および、遺構掘削。
- 11. 5 SK30土器出土状況写真撮影。SD3・14掘削。南壁清掃。
- 11. 8 南壁清掃。SK30土器取り上げ。レベル計測。
- 11. 9 南側斜面の検出。一部遺構掘削。
- 11. 10 南側斜面の検出および遺構（SD31・32）掘削。
- 11. 11 北半部写真撮影のための清掃。および、一部遺構掘削。
- 11. 16 北半部写真撮影。実測のための基準点設定。
- 11. 17 北半部の基準点設定完了。
- 11. 18 北半部実測のための紙割り。実測開始。土層断面実測。
- 11. 19 北半部平面実測および土層断面実測。
- 11. 22 北半部土層断面実測、平面実測。
- 11. 24 北半部レベル計測。
- 11. 25 北半部レベル計測終了。
- 11. 26 南半部表土除去開始。
- 11. 29 南半部表土除去と併行して作業員開始。検出及び、壁清掃。
- 11. 30 南半部表土除去終了。
- 12. 1 A～C列検出。
- 12. 2 南半部、実測のための基準点設定。
- 12. 3 A～C列検出、A・B13・14列遺構掘削開始。
- 12. 6 A・B13～21列、C13・14付近ピット中心に掘削。SD11掘削。
- 12. 7 SH45、SD11、SX47・SK50・51、その他、ピット掘削。
- 12. 8 SD11掘削および、土器出土状況写真撮影。SK44、SH45、SX47、SK49、SK50、

- S H52掘削。土墨表土掘削開始。
12. 9 S D11掘削終了。S H45土層断面実測。S H52範囲確認後、南側の区画のみ掘削。S K53掘削。土墨表土掘削。
12. 10 E16～19列検出。S H45土層観察。S H52土器出土状況写真撮影。S K56掘削。土墨表土掘削。
12. 13 D・E13～16列検出。S H52、C列付近のピット掘削。
12. 14 D・E13～19列検出。S H45掘削終了。
その他、ピット・S K掘削。
12. 15 D・E18・19列、土墨の東側検出。S D15、D・E13～17列ピット等掘削。S K51土器出土状況写真撮影。
12. 16 S D15、28掘削終了。S D33、S K60、S H62掘削。
12. 17 B・C26～28列検出。S K50、59、S D64、S H62、S X63、S Z65掘削。
12. 20 B・C26～28列検出。S H52、S K56、S X63掘削。
12. 21 S K2壁清掃。S Z9土器出土状況写真撮影。S H52土層観察用の畦外し。S X66～68掘削。B～E26～28列ピット等掘削。
12. 22 全景写真撮影のための清掃開始。
12. 24 全景写真撮影のための清掃終了。
12. 28 スカイマスターからの全景写真撮影。南半部平面実測のための基準点設定開始。
1. 4 南半部平面実測のための基準点設定終了。
1. 5 南半部平面実測および、レベル計測。
1. 7 土墨の平板実測、南半部平面実測、レベル計測終了。S X9土器出土状況実測、および取り上げ。
1. 11 南壁土層断面実測。S X74土器出土状況実測、および取り上げ
1. 12 南壁土層断面実測終了。S D11土層観察用畦外し。
1. 14 土墨断ち割り。図面の追加。東側斜面の黒ボクおよび、重機により除去。
1. 18 土墨の下、検出。S D32、76、S X47掘削。
1. 19 S D32掘削終了。完掘状況写真撮影。土墨の下検出。S D69・S X68・S D76・S X63・S H85掘削。
1. 20 S D76・S K81・S X47・S H85・S X68掘削。S X47土器出土状況写真撮影。
1. 21 S X47土器取り上げ。土墨の下掘削終了。
清掃後、写真撮影。
1. 22 土墨の図面追加、修正。土墨の下実測のための基準点設定。終了後、実測開始。
1. 24 図面の追加、修正。土墨の下の実測のための基準点設定。終了後、実測開始。
1. 25 土墨の下実測終了。レベル計測。現場での作業は終了。
1. 26 発掘資材撤収。



第1図 遺跡位置図（1：50,000）『この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図（松阪）を掲載したものである』

II 位置と環境

城堀遺跡（1）は三重県多気郡明和町上村字城堀に所在する。字名については「じょっぽり」または「じょんぼり」と地元では呼称されているが、今回の調査では「じょっぽり」の呼称を使用した。当遺跡は祓川右岸の洪積層の低位段丘上に立地する。祓川は、紀伊山系高見山に源を発する櫛田川の支流であり、国指定史跡である斎宮跡（2）に斎王が入る前、禊をしたとされる河川である。⁽¹⁾かつては祓川が櫛田川の本流であったと考えられている。ここでは、今回の調査に関連する時代の祓川流域および、その近接地の遺跡について触れておきたい。

1 古墳時代

古墳時代においては、多くの遺構、遺物が確認されている。

櫛田川左岸の瀬干遺跡（3）からは前期前葉の方形周溝墓が確認されている。また、琵琶垣内遺跡（4）からは古墳時代前期の竪穴住居などが検出されてい

る⁽²⁾。さらに、古轡通りB遺跡・古轡通り古墳群（5）では古墳時代前期の掘立柱建物や井戸、古墳時代中期の土坑、古墳時代後期の掘立柱建物など古墳時代を通して遺構が確認されている。特に古墳時代前期の大型掘立柱建物は、祭祀のためのものと性格付けられるものである。⁽³⁾中ノ坊遺跡（6）では竪穴住居や土坑から土師器がまとまって出土している。⁽⁴⁾また、横地高畠遺跡（7）からは古墳時代後期の方墳が検出されている。⁽⁵⁾

祓川右岸のコドノA遺跡（8）、からは、古墳時代末の掘立柱建物や竪穴住居、柱穴群、土坑、溝などが検出された。一方コドノB遺跡の一次調査では、掘立柱建物や柱列、土坑、溝などが検出されている。また、二次調査では、弥生時代から古墳時代初頭の竪穴住居や方形周溝墓、三次調査では古墳時代末から奈良時代初期の掘立柱建物や土坑、溝などが確認されている。⁽⁶⁾

さらに、コドノA遺跡の南方には、標高110～130m程度の玉城丘陵と呼ばれる低丘陵が連なっており、数多くの古墳が存在している。

また、当遺跡と隣接する23基からなる神前山古墳群⁽⁷⁾（10）、一号墳が帆立貝式前方後円墳の22基からなる大塚古墳群⁽⁸⁾（11）、さらにその西方からは河田古墳群（12）がある。古墳の数は100基以上からなり、7世紀前葉の短期間に集中的に造営されたと推測されている。⁽⁹⁾ また、天王山古墳群（13）は5世紀後半～7世紀後半に造営されたと推定される。

2 奈良・平安時代

奈良時代には横地高畠遺跡で堅穴住居や土坑などが確認されており、⁽¹¹⁾ 平安時代には横地西ノ垣内遺跡（14）から掘立柱建物が見つかっている。⁽¹²⁾

大上川遺跡（15）では、溝から「神宮寺」と墨書された土師器皿が見つかっており、神宮寺との関連が推定される。⁽¹³⁾

この時代にとって重要なのが斎宮の存在である。天皇の御杖代として未婚の皇女が伊勢神宮に奉仕する斎王制度は天武朝には確立し、南北朝まで存続した。多気郡には斎宮寮がおかれ、櫛田川は「神の近界」であった。⁽¹⁴⁾

3 鎌倉・室町時代以降

櫛田川および祓川の下流域については近年、多くの遺跡が調査されている。古川遺跡（14）では掘立柱建物、井戸などが確認されている。⁽¹⁵⁾ 横地高畠遺跡（15）からも同様に掘立柱建物、井戸などが見つかっている。⁽¹⁶⁾ また、前述の中ノ坊遺跡では土壙や区画溝と考えられる大溝や井戸が確認されている。⁽¹⁷⁾

また、櫛田川左岸では櫛田地区内遺跡群として、かん志ゆう、池ノ端地区（17）から、南東隅土坑を伴う掘立柱建物や土坑墓などが検出された。⁽¹⁸⁾

櫛田上地区の山添遺跡（18）からも掘立柱建物や井戸の存在が確認されている。⁽¹⁹⁾ これらの遺跡から中世の集落跡の様相を垣間見ることができる。

コドノA遺跡の西の標高50mの独立丘陵に岩内城（19）と呼ばれる中世城館がある。北畠氏の氏族である岩内主膳正光安が住み、岩内御所と称していたが、光安の子息が2歳の時に北畠具親の養子として北畠に改称し、具親敗走の時に家系は絶したとさ

れる。今回、城堀遺跡から検出された土壙の存在から、岩内城となんらかの関連をもつものとして注目される。

〔註〕

- (1) 宇河雅之・袖岡直樹「II瀬干遺跡」『瀬干遺跡・綾垣内遺跡・大蓮寺遺跡・北ノ垣内遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）。
- (2) 原田恵理子『瀬干遺跡〔第2次〕発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）。
- (3) 奥野実『琵琶垣内遺跡〔第2次〕発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1999年）。
- (4) 奥野実ほか『古轡通りB遺跡・古轡通り古墳群発掘調査報告書』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）。
- (5) 伊藤裕之『中ノ坊遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）。
- (6) 中川明『横地高畠遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1998年）。
- (7) 西出孝『コドノA・B遺跡〔第1次〕発掘調査報告—多気郡明和町上村一』（三重県埋蔵文化財センター、1998年）。
- (8) 西出孝『コドノB遺跡〔第2・3次〕発掘調査報告—多気郡明和町上村一』（三重県埋蔵文化財センター、2000年）。
- (9) 下村登良男『神前山1号墳』（明和町教育委員会、1973年）。
- (10) 下村登良男『河田古墳群周辺の古墳分布』『河田古墳群発掘調査報告書III』（多気町教育委員会、1986年）。
- (11) 前掲（8）に同じ。
- (12) 松阪市史編纂委員会『松阪市史』第2巻（資料編・考古、1978年）。
- (13) 前掲（6）に同じ。
- (14) 大川操『横地西ノ垣内遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1999年）。
- (15) 柴山圭子『大上川遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1999年）。
- (16) 『斎王宮跡資料』（三重県教育委員会、1978年）。
- (17) 伊藤裕之『古川遺跡・山口遺跡発掘調査報告書』（三重県埋蔵文化財センター、1996年）。
- (18) 前掲（5）に同じ。
- (19) 木野本和之・高田恵理子『櫛田地区内遺跡群発掘調査報告II』（三重県埋蔵文化財センター、1997年）。
- (20) 新田洋『山添遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会、1979年）。
- (21) 坂倉一光『山添遺跡〔第2次〕発掘調査報告』（『山添遺跡〔第2次〕・里前遺跡発掘調査報告』ほか（三重県埋蔵文化財センター、1997年）。
- (22) 『日本城郭体系10、三重・奈良・和歌山』（新人物往来社、1980年）。



第2図 遺跡地形図（1：10,000）



第3図 調査区位置図（1：1,000） ■は試掘坑

III 層位と遺構

1 層位

基本層序は第1層：表土、第2層：7.5YR4/2灰褐色土（中世遺物包含層）第3層：2.5YR7/6明黄褐色土（地山）の順で検出は第3層上面で行った。部分的に黒ボクが地山の上面に堆積していた。また、調査区東端から30mほど西には黒ボクの二次堆積と見られる層が分布していた。

2 遺構

今回検出された主な遺構には、古墳時代の方形周溝墓、竪穴住居、飛鳥末～奈良時代の竪穴住居、土坑、鎌倉～室町時代の溝などがある。以下、時期別、遺構毎にその概略を述べる。

(1) 古墳時代前期

A 竪穴住居

S H52 調査区中央部よりやや東寄りで検出された。一辺約6mの正方形を呈する。北辺をS H62に、西辺をS H50に切られる。主柱穴に相当するものは認められなかった。検出面からの深さは0.36mである。出土遺物は少なく、図示できるものは朱が部分的に施された高杯（11）が出土したくらいであった。

B 方形周溝墓

S X47 調査区東端部で検出された。S D76によって北側の周溝がS X68の南側の周溝と共有している。その共有する部分から土器がまとまって出土した。周溝の最大幅は2.2m（S X68との重複部は除く）検出面からの深さは0.6～7mである。南北軸方向はN0°W。周溝の外側はやや緩やかに傾斜するが、内側は特に東側の周溝では傾斜がきつくなる。遺物は土師器の壺などが出土している。

S X63 S X68の西で検出された。周溝の最大幅は2.3m検出面からの深さは0.3～0.56mである。南北軸方向はN44°W。周溝の外側はやや緩やかに傾斜するが、内側の周溝では傾斜がきつくなる。南側に周溝の中央部もしくは東寄りに陸橋をもつタイプである。土師器の壺（6～9）、高杯（10）などが出土している。

S X68 調査区の東端で検出された。S X47と同様S D76によって、南側の周溝がS X47と重複し、切

り合いが不明確である。周溝の現存最大幅は2.1m（S X47との重複部は除く）検出面からの深さは0.37～0.57mである。南北軸方向はN20°E。周溝の外側はやや緩やかに傾斜するが、内側の周溝では傾斜がきつくなる。土師器の壺（1～5）などが出土している。

(2) 飛鳥時代末～奈良時代

A 竪穴住居

S H45 調査区中央部、南壁付近で検出された。一辺約4.1mの正方形を呈する。検出面からの深さは0.35mである。土師器の甕（25～27）、杯（24）などが出土している。

S H50 調査区中央部、S H52を切って検出された。一辺約3mの正方形を呈する。検出面からの深さは0.27mである。主柱穴らしいものは見つけられなかった。東南壁にカマドの支柱石らしい石が確認されている。

S H59 調査区中央部北壁際から検出された不定形の竪穴住居である。検出面からの深さは0.3mである。ピットは主柱穴ではないかと考えられる。土師器の甕（32）などが出土している。

S H62 S H52を切って検出された。南北2.7m、東西3.0mのやや長方形を呈する。検出面からの深さは0.35mである。主柱穴やカマドなどは見つけられなかった。土師器の甕（28）や皿（29）、土錘（30・31）などが出土している。

S H85 調査区東端で検出された不定形の竪穴住居である。東側の辺はS D76に切られて全体は把握できなかった。検出面からの深さは0.28mである。土師器の甕、皿などが出土している。

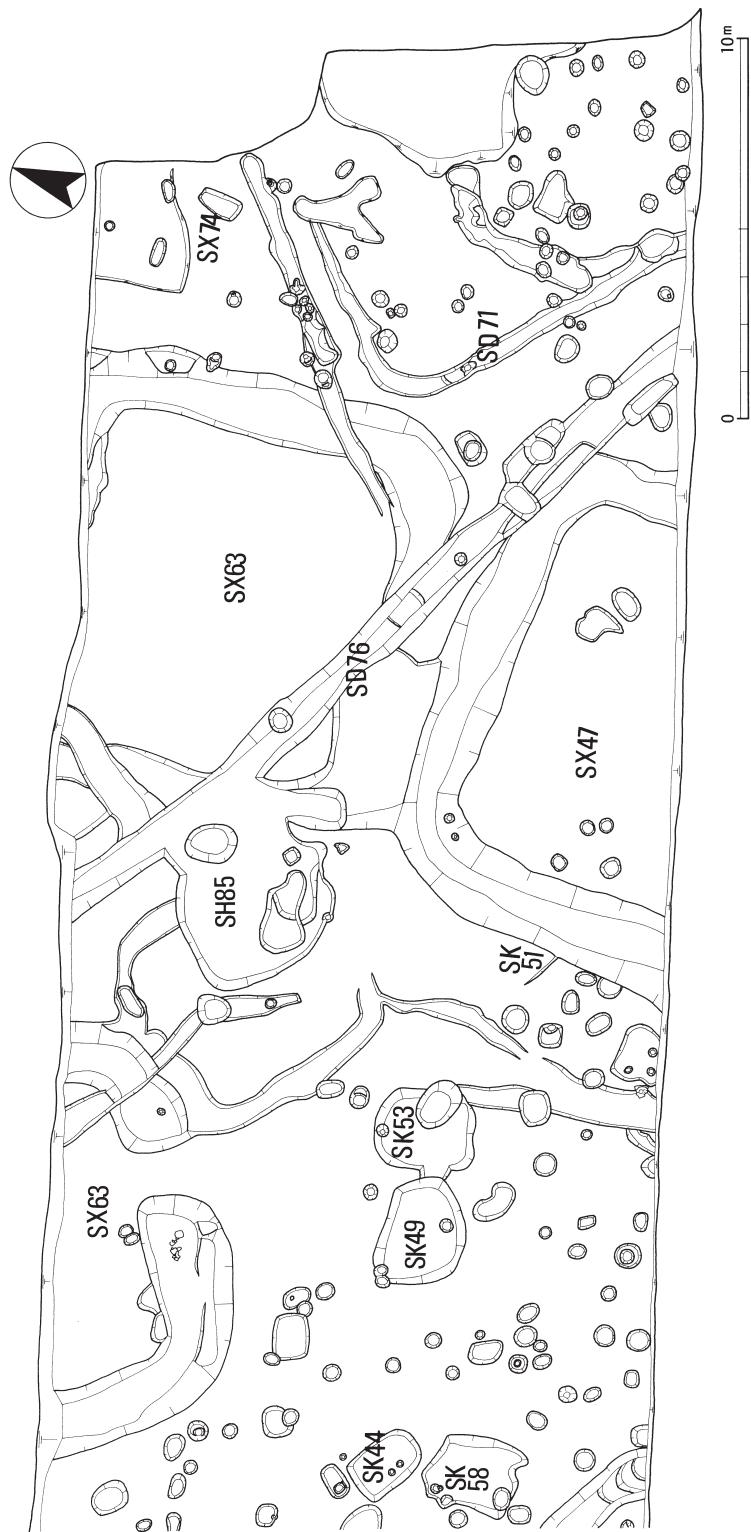
B 土坑

S K30 調査区西半部S D30の北で検出された。長辺2.7m、短辺1.1mの長方形の土坑である。検出面からの深さは0.2mである。出土遺物には、土師器の甕（12）や、須恵器の壺（13）、杯身（14）などがある。

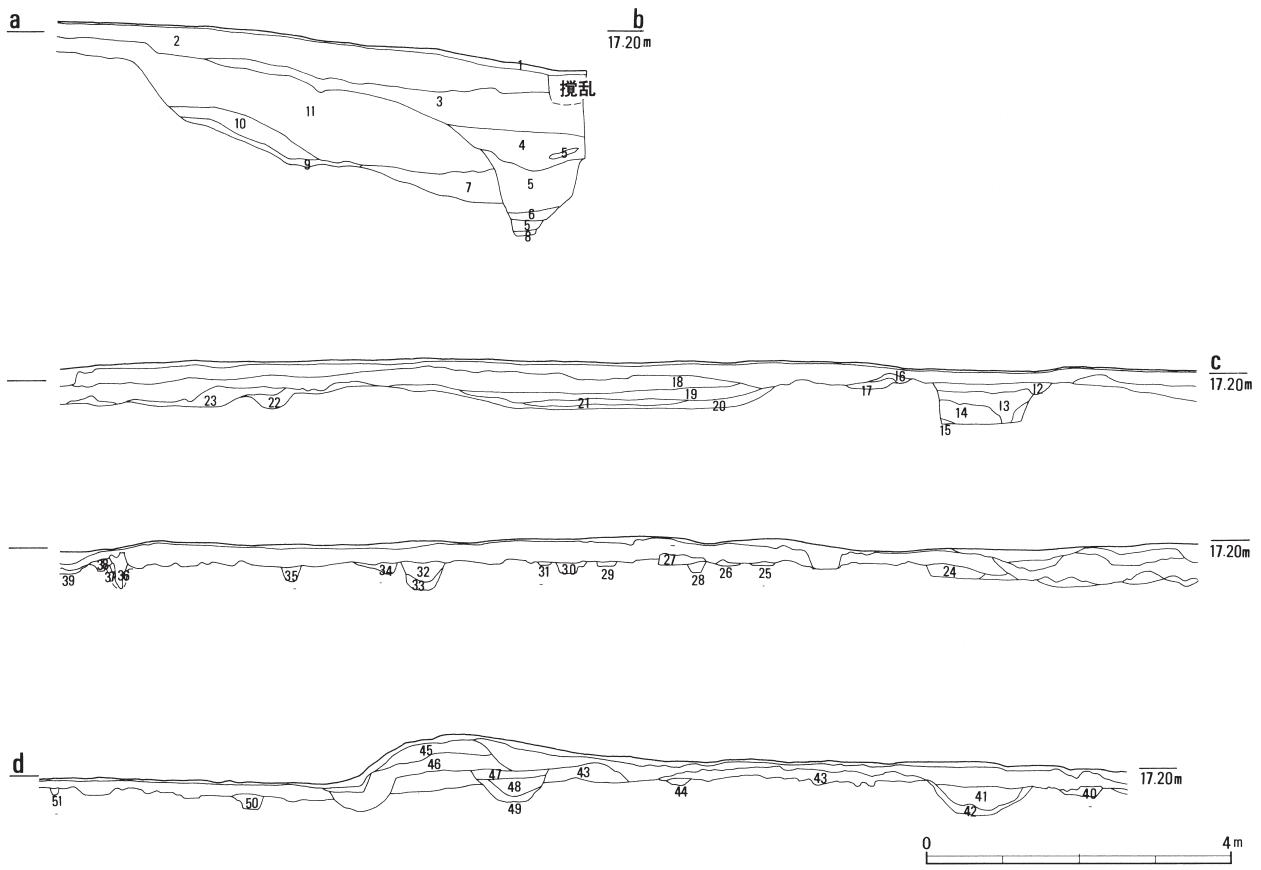
S K40 調査区中央部S X65の西で検出された。最大長は3.7mの不定形の土坑だが、竪穴住居の可能



第4図 調査区平面図 (1:300)

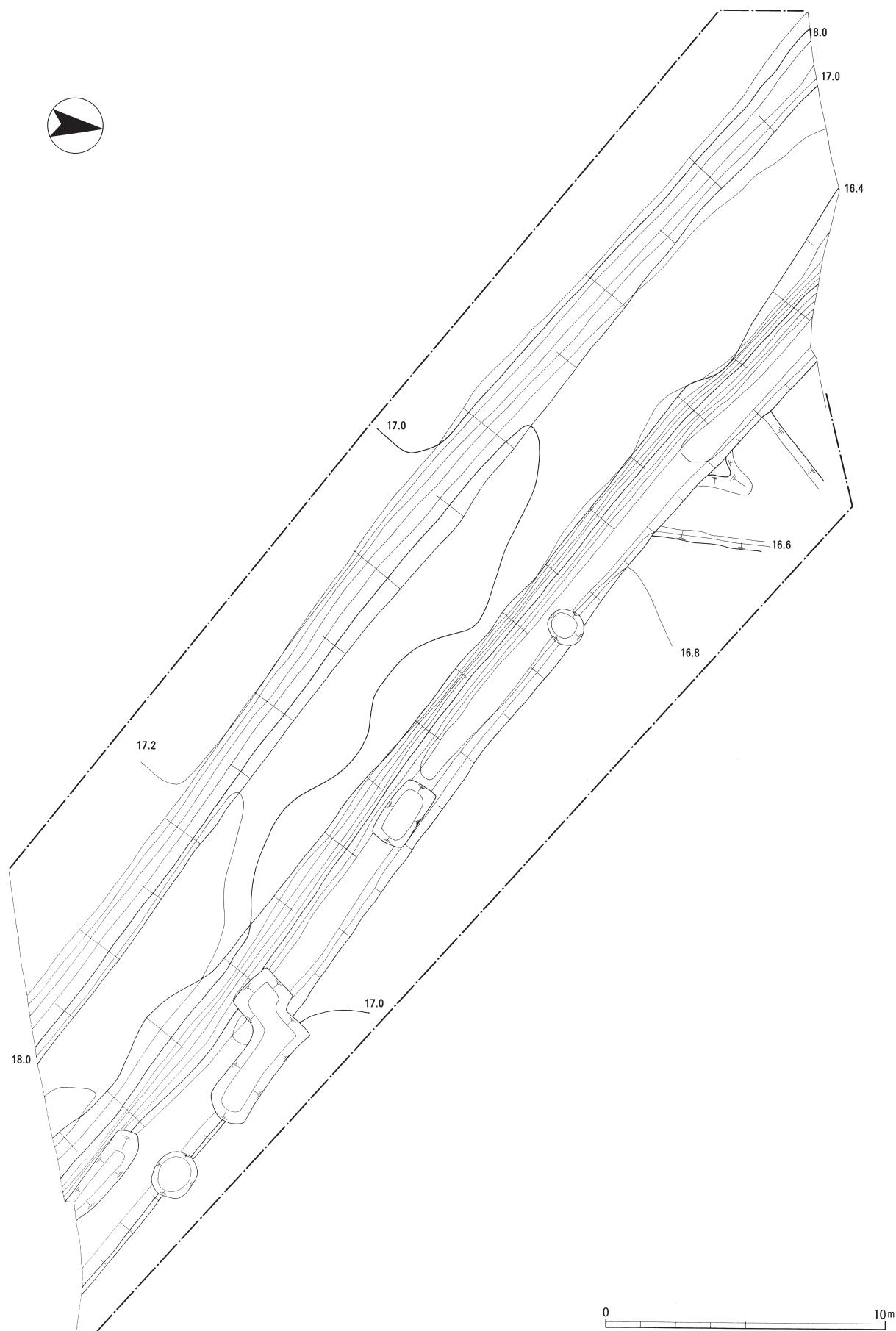


第5図 調査区平面図（土壌の下）（1：200）

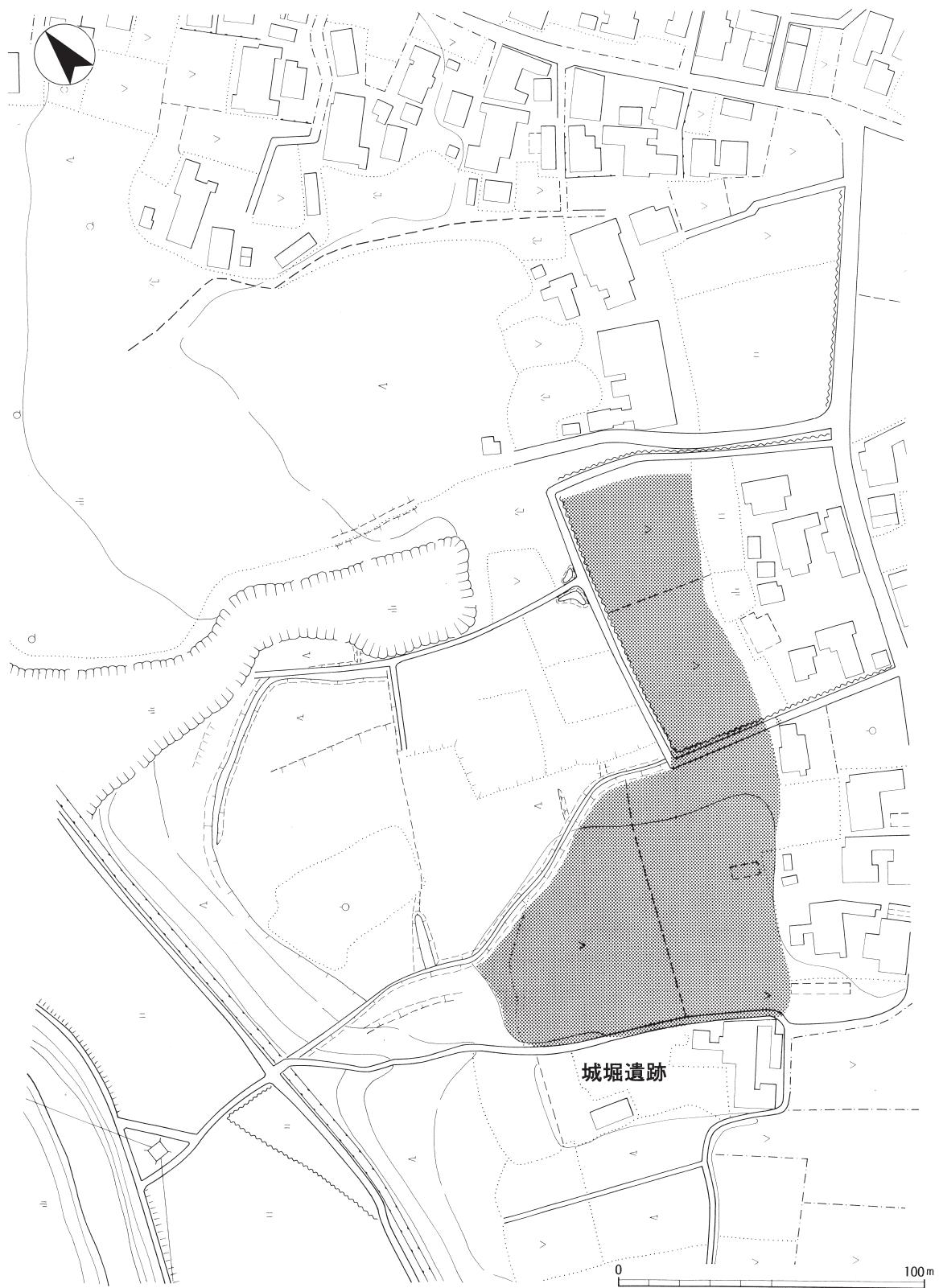


1. 表土
 2. 7.5YR4/2 灰褐色土（包含層）
 3. 10YR2/1 黒色土に径5~10cmの礫・10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック混じる
 4. 7.5Y4/2 灰褐色土に径1~2cmの礫多く混じる（遺構埋土）
 5. 10YR2/1 黒色土に径5~10cmの礫多く混じる（遺構埋土）
 6. 10YR3/3 暗褐色砂質土に径1~10cmの礫多く混じる（遺構埋土）
 7. 10YR3/3 暗褐色土に径1~5cmの礫多く混じる
 8. 7.5Y4/2 灰褐色土
 9. 10YR4/2 灰黃褐色土
 10. 10YR4/2 灰黃褐色土
 11. 10YR4/2 灰黃褐色土
 12. 10YR3/3 暗褐色土に5Y4/8 赤褐色土ブロック混じる（SK2埋土）
 13. 10YR3/3 暗褐色土に7.5Y5/6 明褐色土ブロック・5Y4/8 赤褐色粘質土ブロック混じる（SK2埋土）
 14. 7.5Y4/2 灰褐色～10YR2/1 黒色土に10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック混じる（SK2埋土）
 15. 7.5Y5/6 明褐色砂質土に7.5Y4/8 赤褐色土ブロック混じる（SK2埋土）
 16. 7.5Y4/2 灰褐色土に10YR5/6 黄褐色土ブロック混じる（遺構埋土）
 17. 7.5Y5/6 明褐色粘質土
 18. 7.5Y3/3 暗褐色土（SD11埋土）
 19. 7.5Y3/1 黑褐色土に10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック混じる（SD11埋土）
 20. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土に10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック混じる（SD11埋土）
 21. 7.5Y3/1 暗褐色土に礫・10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック混じる（SD11埋土）
 22. 7.5Y3/3 暗褐色土に礫・10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック混じる（SD11埋土）
 23. 10YR5/6 黄褐色粘質土（SD11埋土）
 24. 10YR4/3 にぶい黄褐色土（SD11埋土）
 25. 10YR4/3 にぶい黄褐色土に7.5Y3/1 黑褐色土に10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック混じる（遺構埋土）
 26. 10YR4/3 にぶい黄褐色土に7.5Y3/1 黑褐色土に10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック混じる（遺構埋土）
 27. 7.5Y3/3 暗褐色土（遺構埋土）
 28. 10YR4/3 にぶい黄褐色土に7.5Y3/1 黑褐色土に10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック混じる（遺構埋土）
 29. 7.5Y3/1 黑褐色土に10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック混じる（遺構埋土）
 30. 10YR5/6 黄褐色粘質土（遺構埋土）
 31. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土（遺構埋土）
 32. 7.5Y3/3 暗褐色土に10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック混じる（SD36埋土）
 33. 7.5Y4/2 灰褐色砂質土に7.5Y4/8 赤褐色粘質土ブロック混じる（SD36埋土）
 34. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土に10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック混じる（遺構埋土）
 35. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土に10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック混じる（遺構埋土）
 36. 7.5Y3/1 黑褐色土に10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック混じる（遺構埋土）
 37. 10YR5/6 黄褐色土（遺構埋土）
 38. 10YR3/1 黑褐色土（遺構埋土）
 39. 10YR3/1 黑褐色土に10YR5/6 黄褐色粘質土ブロック若干混じる（遺構埋土）
 40. 10YR4/3 にぶい黄褐色土（SK37埋土）
 41. 10YR3/1 黑褐色土（SX47埋土）
 42. 10YR3/3 暗褐色土に10YR6/6 明褐色粘質土ブロック混じる（SX47埋土）
 43. 7.5YR2/1 黑色土
 44. 10YR3/3 暗褐色粘質土（遺構埋土）
 45. 7.5Y3/2 黑褐色砂質土（土壌およびSD76埋土）
 46. 7.5Y4/4 褐色土に7.5Y5/4 にぶい褐色土ブロック混じる（土壌およびSD76埋土）
 47. 10YR3/1 黑褐色土～7.5Y4/4 褐色土（SX47埋土）
 48. 10YR3/1 黑褐色土に10YR5/3 にぶい黄褐色土ブロック混じる（SX47埋土）
 49. 10YR3/1 黑褐色土に7.5Y5/4 にぶい褐色土ブロック混じる（SX47埋土）
 50. 7.5Y3/2 黑褐色砂質土（遺構埋土）
 51. 10YR3/4 暗褐色粘質土（遺構埋土）

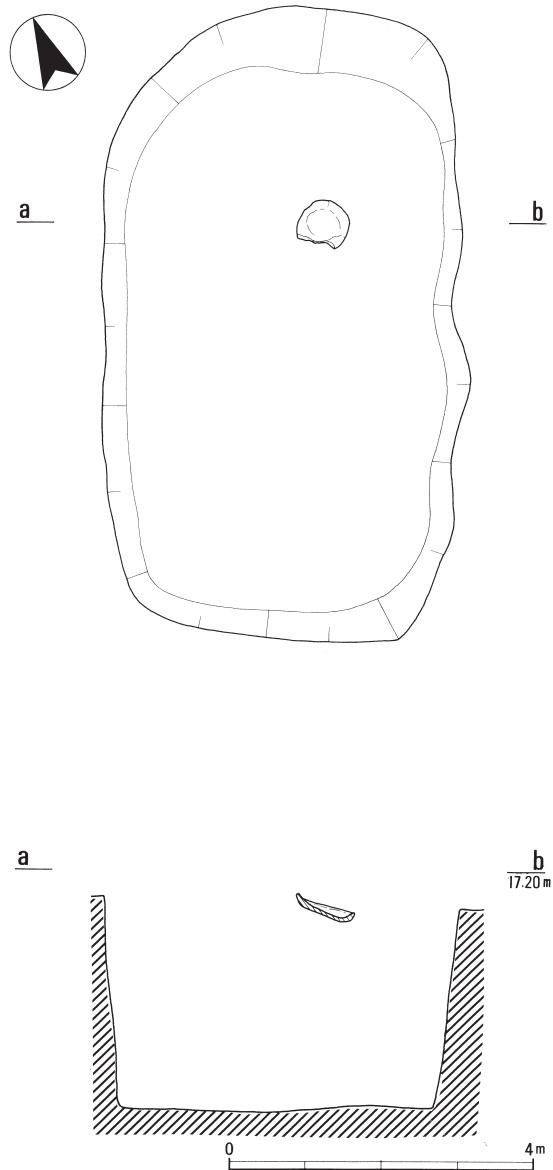
第6図 調査区南壁土層断面図 (1:100)



第7図 土壌平面図 (1:100)



第8図 土壘推定復元図 (1 : 2,000)



第9図 SK56 土器出土状況図 (1:40)

性もある。検出面からの深さは0.15mである。出土遺物には土師器の甕(15・16)や杯(17)などがある。

S K58 S H52の南で検出された。短辺1.8m、長辺2.8mのやや不定形の土坑である。検出面からの深さは0.28mである。土師器の皿(23)や杯(22)などが出土している。

(3) 鎌倉時代～室町時代

A溝

S D 3 調査区の西側を南北に縦断する溝である。最大幅は0.9mで、検出面からの深さは、0.18から0.24mであり、北に向かって浅くなっている。出土遺物には、無釉陶器の椀(34)や土師器皿などがある。

S D 14 南北溝であるS D 3の東側でほぼ平行する溝である。最大幅は0.8mで検出面からの深さは、

0.17から0.28mで南に向かって深くなっている。無釉陶器の椀や土師器の皿(35)などが出土している。

S D 15 S D 14の東側をほぼ平行に南北に走る溝である。最大幅は0.7mである。検出面からの深さは、0.9から0.28mで北に向かって浅くなっている。出土遺物には無釉陶器の椀や土師器などがある。

S D 31 調査区の西端をS D 3・14・15とほぼ平行に走る溝である。最大幅は1.4m、検出面からの深さは0.13から0.57mと溝底は一定ではなかった。出土遺物には無釉陶器の椀(36)、土師器などがある。

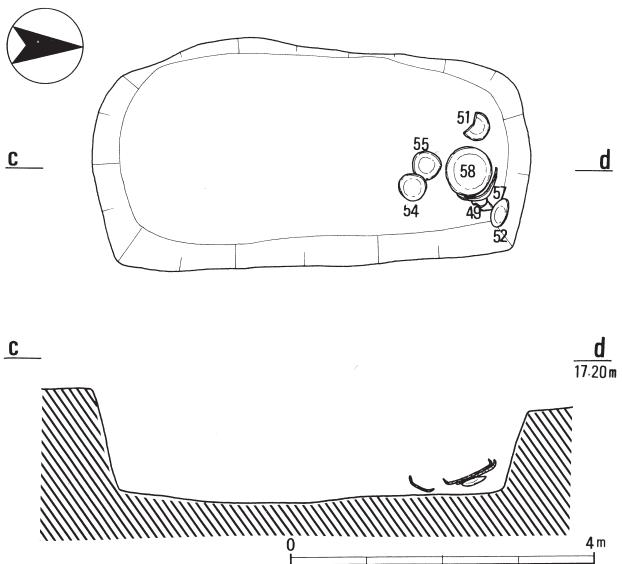
土壙とS D 7 6 調査区東端部で南北に走る土壙と、それに伴うと考えられる溝である。土壙は、調査区の外でも南北方向にめぐるものと思われる。土壙と溝の土層は南壁で確認したが、地山をS D 76が切り込み、S D 76を掘削した地山の土砂を土壙の構築に利用している。S D 76は最大幅は1.1mである。検出面からの深さは、0.27から0.57mで北に向かって深くなっている。出土遺物は無釉陶器の椀(59～62)や古瀬戸後期の陶器の鉢、常滑窯産の甕、青磁の椀(63)、土師器の皿(64～67)などがある。

C土坑

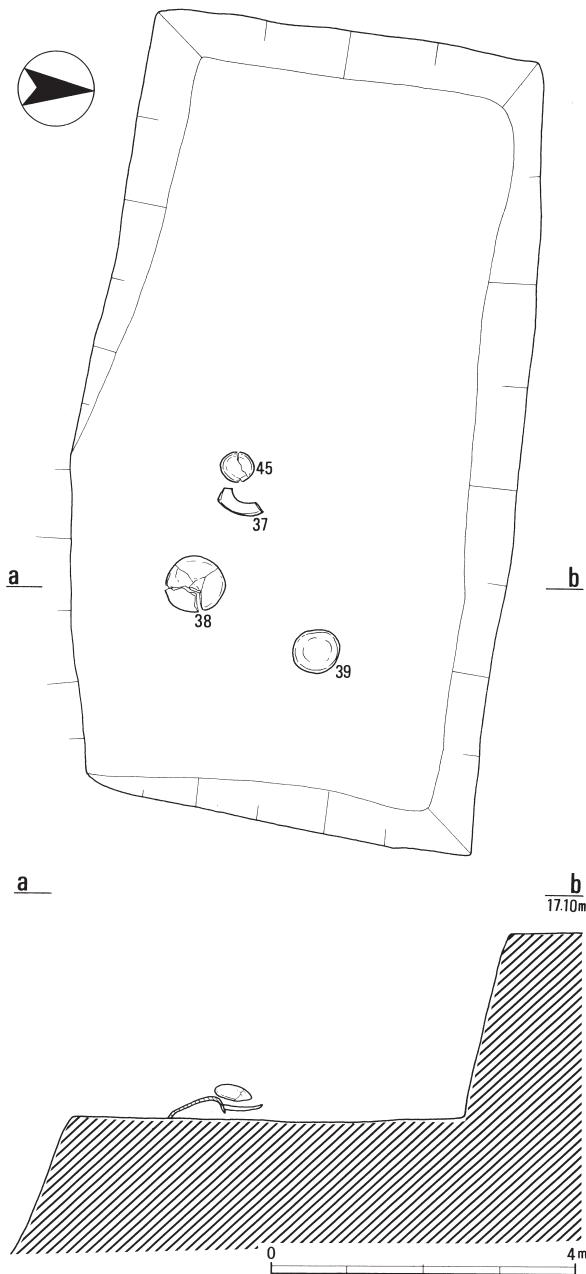
S K 2 調査区西端で検出された。南端は南壁に切られる。不定形の土坑で、検出面からの深さは最深部で0.9mである。無釉陶器の皿(33)のほかは遺物はほとんど出土しなかった。

D墓

S X 9 調査区中央部西寄りでS D 11に切られて



第10図 SX74 土器出土状況図 (1:40)



第11図 S X 9 土器出土状況図 (1:40)

検出された。短辺1.2m長辺2.1mの長方形の土坑で土師器の皿（38～48）がまとまって出土していることや形状などから墓と判断した。検出面からの深さは0.44から0.54mである。出土遺物は、ほかに白磁の皿（37）などがある。

S X 7 4 調査区最東端北側の壁付近で検出された。短辺0.8m、長辺1.2mの長方形の土坑で、S X 9 同様土師器の皿がまとめて出土したこととその形状から墓と判断した。検出面からの深さは0.3mである。遺物は土師器の皿（49～58）以外は出土しなかった。

E 不明遺構

S Z 6 5 調査区のほぼ中央部にある S H59のなかで検出された。短辺1.2m長辺2.0mの長方形の土坑で、こぶし大の石が一面に敷き詰められていた。検出面からの深さは0.45mである。出土遺物には無釉陶器の椀や土師器の皿などがある。S X 9・74同様、土坑墓ではないかとも考えられる。

(4) 室町～戦国時代

A 溝

S D 11 調査区中央部、南端に平行に20mほど走り、東端で調査区外に曲がる。溝の西側は攪乱によって削平されており、西側部分は明らかではない。幅は2.8m以上で、検出面からの深さは0.88～0.45mで北に向かって浅くなる。遺物は、土師器の鍋が東側の調査区外へ曲がる付近からまとまって出土した。その他には、瀬戸・美濃窯産陶器の擂鉢（68）や天目茶椀（69・70）、常滑窯産陶器の甕（71）、土師器の鍋（73・74）や土錘などが出土している。

B 土坑

S K 51 調査区西端部、S X 47のすぐ西で検出された土坑である。検出面からの深さは0.1mと浅く、北側の肩は検出時に削平されてしまった。出土遺物には土師器の皿（76・77）や鍋（75）などがある。

IV 遺 物

遺物は、古墳時代、飛鳥末から奈良時代、鎌倉から室町時代、戦国時代の土師器、陶磁器が出土している。以下、時代順、遺構別にその概略を述べる。なお、中世の土器の表記で、通常山茶椀と呼称されている恣器系無釉陶器第Ⅱ類⁽¹⁾については、無釉陶器とした。

また、無釉陶器の年代に関しては藤澤良祐氏⁽²⁾、常滑窯産陶器は赤羽一郎氏・中野晴久氏⁽³⁾、戦国時代の土師器については伊藤裕偉⁽⁴⁾氏の見解に拠っている。

A 遺構出土の遺物

1. 古墳時代前期の遺物（1～11）

S X88（1. 2）

すべて、土師器である。1は壺で口縁部に刺突文、体部上半には刺突文および櫛搔横線文が施される。口縁部はやや外反する。2は壺の上半部である。摩滅が激しいため、調整は外面にわずかにハケメが残る程度である。

S X47（3～5）

すべて、土師器壺である。3は口縁部に刺突文、体部上半部には刺突文および櫛搔横線文が施される。竹管文もわずかながら残る。4は頸部に櫛搔横線文が施される。5は、外面のハケメが他のものと比べると、粗く、単位が短い。

S X63（6～10）

すべて、土師器である。6は摩滅のために調整が不明瞭であるが、口縁部付近に黒斑が認められる。7は壺の体部である。内面は工具によってなでられている。外面はミガキとケズリにより、調整されている。8は壺の頸部である。内面にはわずかにハケメが残り、外面は磨かれ、口縁部はヨコナデされる。9は壺である。外面には、口縁部付近に刺突文が施される。底部付近にはススが付着している。10は高杯である。杯部は摩滅のために調整が不明瞭である。脚部に3方向に透孔が認められる。

S H52（11）

11は高杯である。4方向の透孔が認められ、透孔付近に朱がわずかに残る。

2. 飛鳥末～奈良時代（12～34）

S K30（12～14）

12は土師器の甕である。内面にはヨコ方向に、外面には乱方向のタテハケが施される。13・14は須恵器である。13は壺、14は杯身である。

S K40（15～17）

すべては土師器である。15・16は甕で、15の底部外面にはヘラ記号が見られる。

S K48（18）

土師器の皿である。底部内面にススが付着している。

S K53（19）

土師器の皿である。

S K58（20～23）

すべて土師器である。20・21は土錘である。22・23は皿である。22は外面のケズリが顕著である。23は底部外面にヘラ記号と暗文が認められる。

S H45（24～27）

すべて土師器である。24は杯、25～27は甕である。

S K59（32）

土師器の皿である。外面にススが付着している。

3. 鎌倉～室町時代（33～58）

S K 2（33）

33は無釉陶器の皿である。底部から直線的に立ち上がる。藤澤編年第6・7期に比定されよう。

S D 3（34）

無釉陶器の椀である。体部はやや丸みをもって立ち上がり、口縁部はやや開く。藤澤編年第6期に相当しよう。

S D14（35）

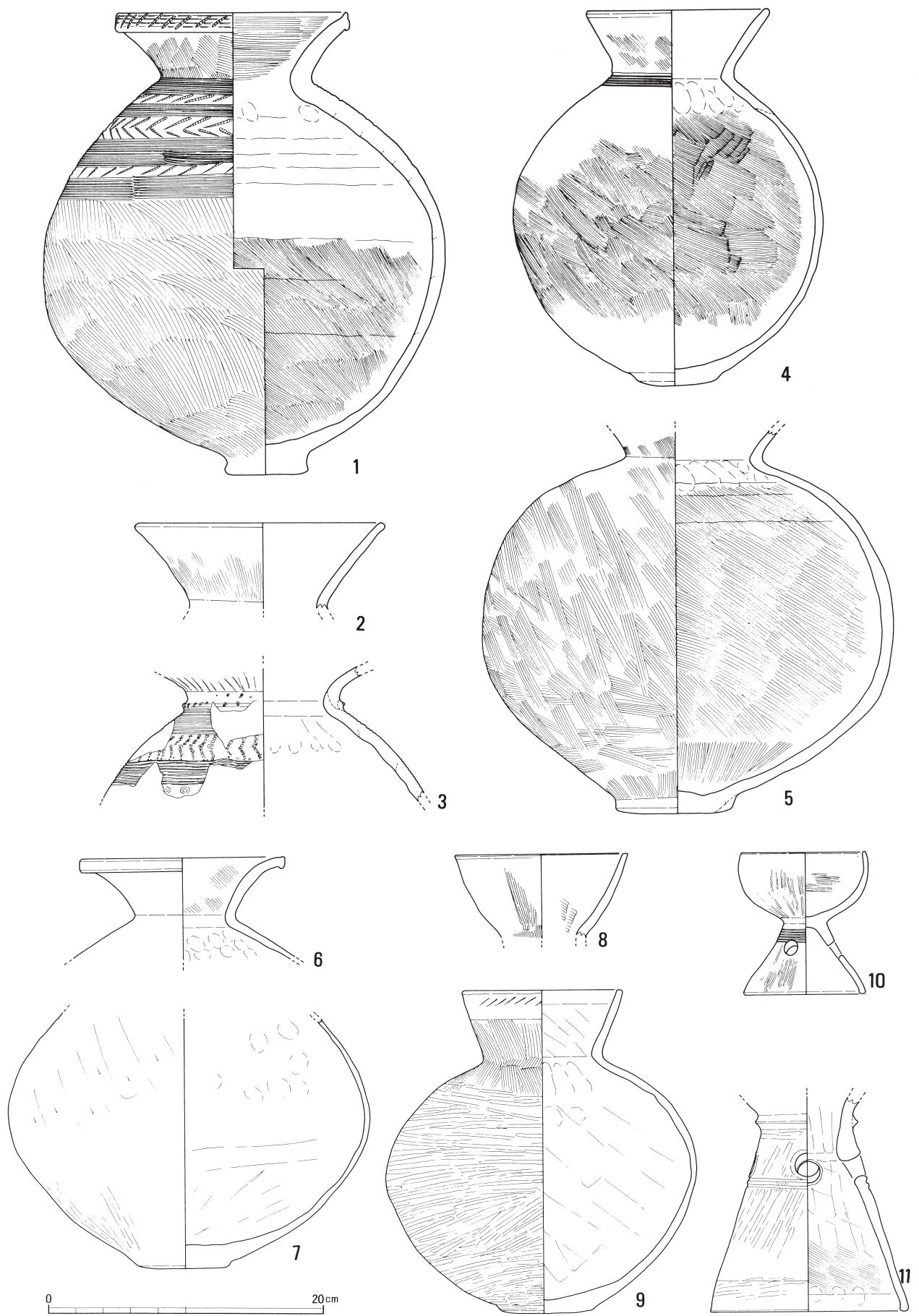
土師器の皿である。体部はやや直線的である。

S D31（36）

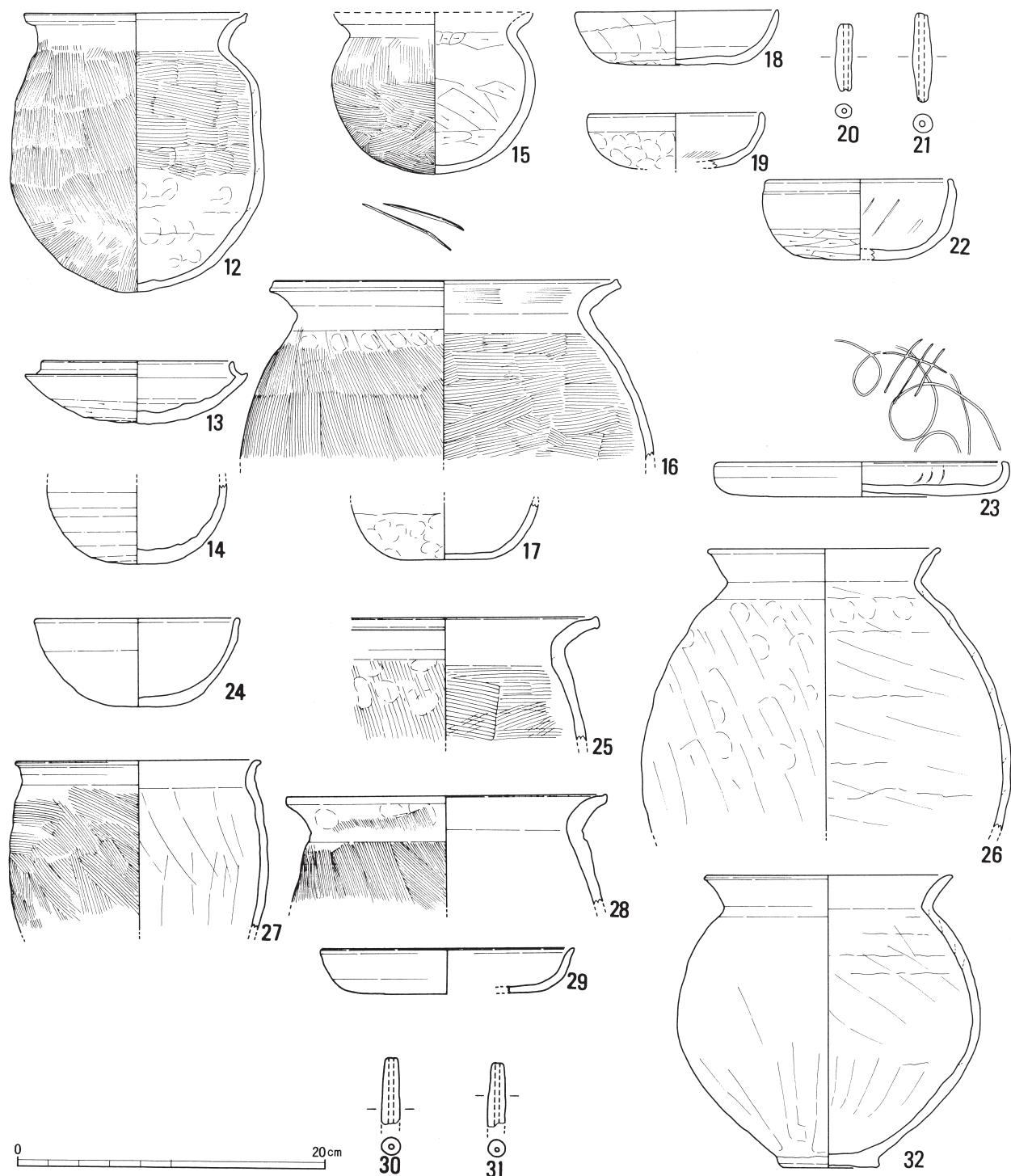
無釉陶器の椀の底部である。藤澤編年第6期に相当しよう。

S X 9（37～45）

37は白磁の皿である。38～45は土師器の皿である。口径が8cm前後で器高が高いものと（38・39）と口径が4.5cm前後で扁平なもの（40～45）とがある。



第12図 出土遺物実測図 (1) (1:4)



第13図 出土遺物実測図（2）（1:4）

S Z65 (46~48)

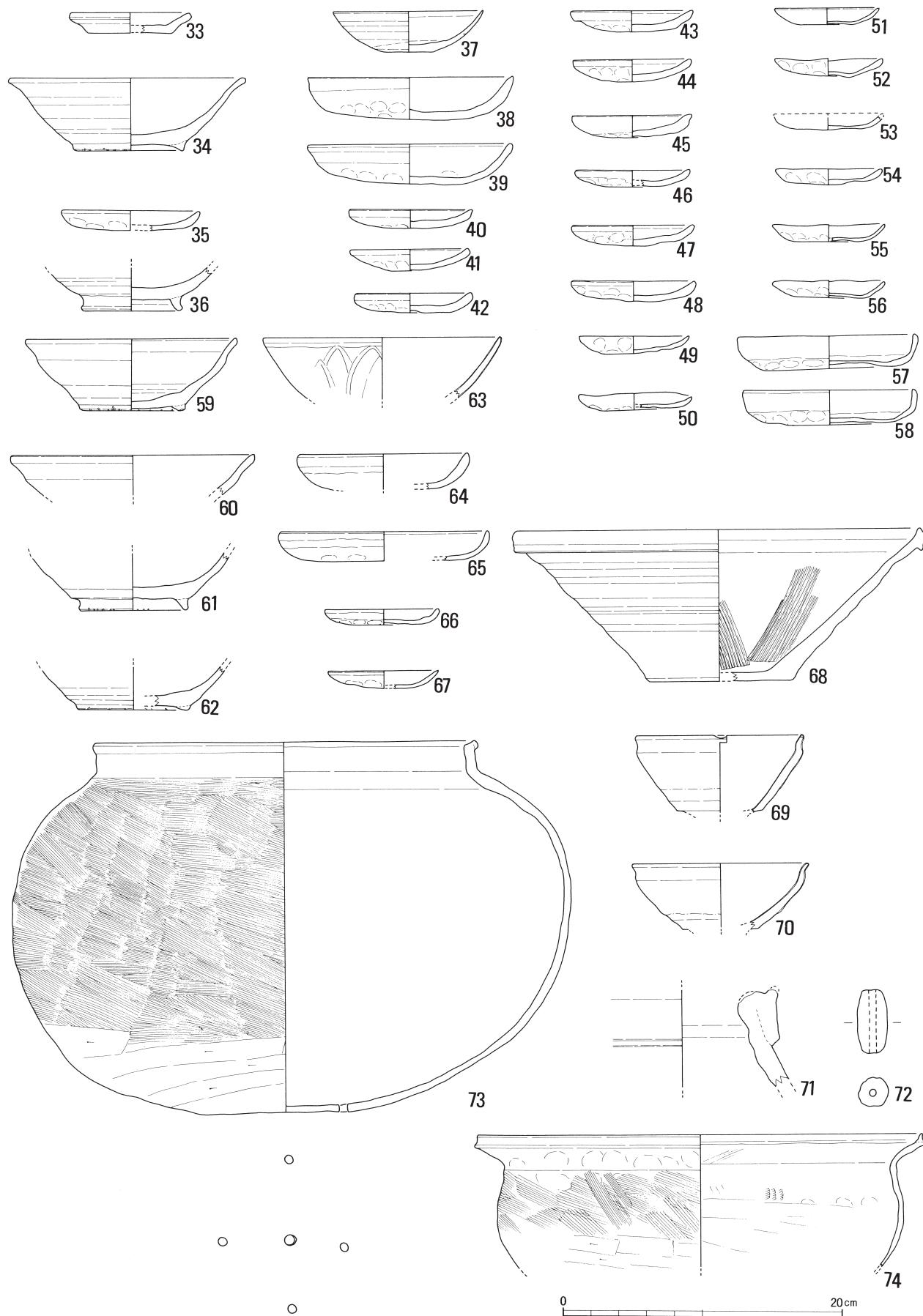
すべて土師器の皿である。S X 9 の扁平なものと類似する。

S X74 (49~58)

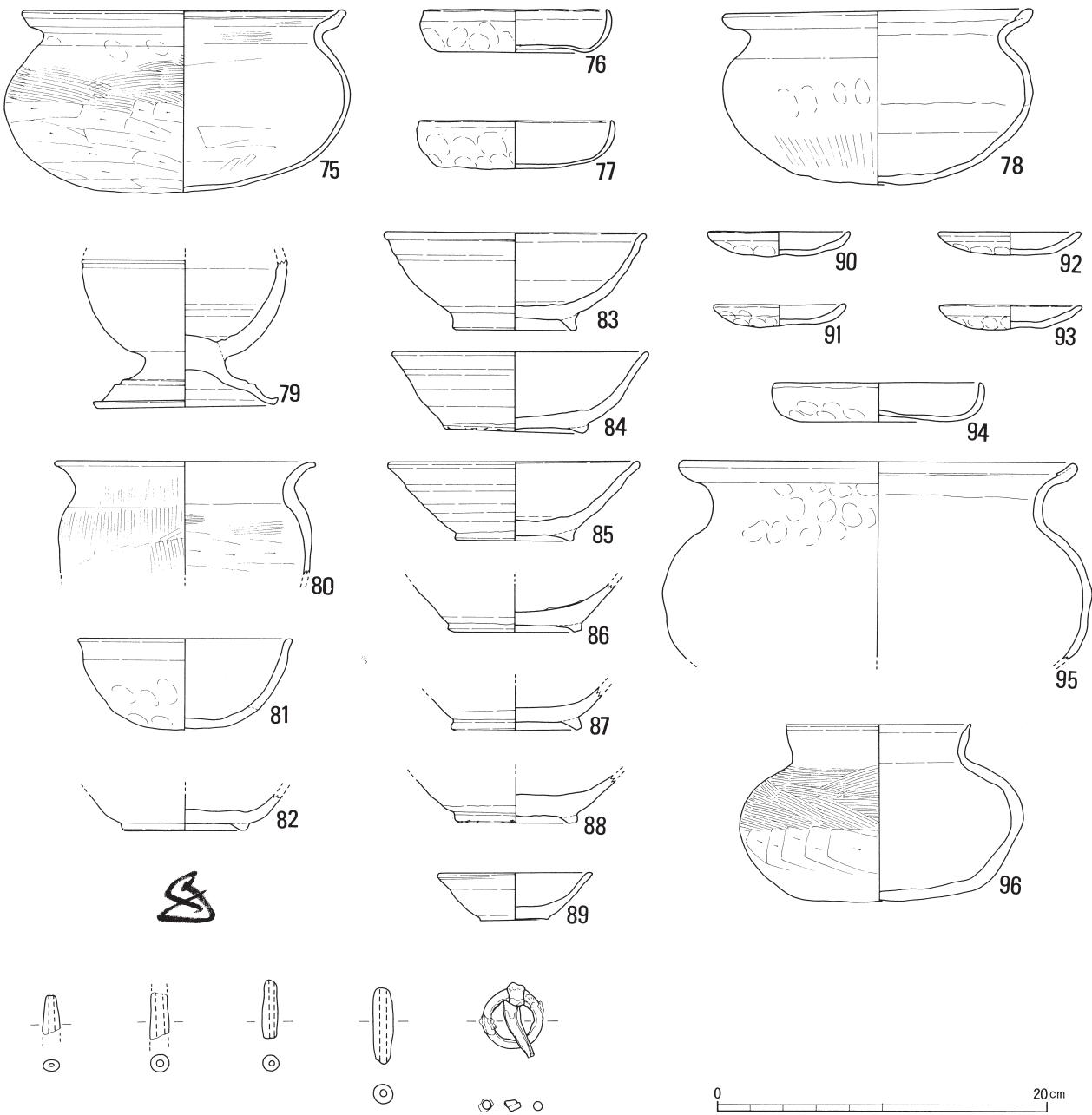
すべて土師器の皿である。S X 9・65の扁平なものと比べ、器壁が薄い。

S D76 (59~67)

61~64は無釉陶器の椀である。61は底部がやや肥厚し、口縁部はやや開くか。すべて藤澤編年第6期に相当しよう。65は青磁の椀である。連弁文が片彫りされる。66~69は土師器の皿である。口径が大きく、器高が高いもの（64・65）と口径が小さく、扁



第14図 出土遺物実測図（3）（1:4）



第15図 出土遺物実測図 (4) (1:4)

平なもの（66・67）とがある。

4. 戦国時代 (70~80)

70は瀬戸・美濃窯産陶器の擂鉢である。藤澤編年大窯I期に比定されよう。69・70は瀬戸・美濃窯産陶器の天目茶碗である。藤澤編年大窯I期に比定されよう。71は常滑窯産陶器の甕である。中野・赤羽編年9期に比定されよう。73は土師器の茶釜型の鍋である。底部に4孔が穿たれている。伊藤編年4段階に相当しよう。

S D51 (75~77)

75~77は土師器である。75は鍋で伊藤編年1段階に相当しよう。76・77は土師器の皿である。

S D56 (78)

80は土師器の鍋である。伊藤編年1か2段階に相当しよう。

B 遺構外出土の遺物 (79~101)

奈良時代 (80・81)

ともに土師器である。80は甕である。81は杯である。

鎌倉～室町時代 (82~95)

82～88は無釉陶器の椀である。いずれも藤澤編年第6期に相当しよう。89は無釉陶器の皿である。

戦国時代（95）

土師器の鍋である。伊藤編年1段階に比定されよう。

江戸時代（96）

土師器の甕か。

〔註〕

- (1) 『世界陶磁全集3 日本中世』(小学館、1997年)。
- (2) 藤澤良祐「山茶椀研究の現状と課題」『研究紀要 第3号』(三重県埋蔵文化財センター、1994年)。
- (3) 赤羽一郎・中野晴久「生産地における編年について」『全国シンポジウム 中世常滑焼きを追って』(日本福祉大学知多半島総合研究所、1994年)。
- (4) 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』Vol 1 三重歴史文化研究会 伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要 第1号』(三重県埋蔵文化財センター、1990年)。

V 結語

今回の調査では、古墳時代の方形周溝墓や竪穴住居、飛鳥末から奈良時代にかけての土抗、竪穴住居、鎌倉・室町時代の土抗や溝・土壘・土抗墓、戦国時代の溝などが検出された。そこでそれぞれが、どのように、地域の歴史のなかで位置づけられるか、若干の考察を試みたい。

（1）方形周溝墓について

今回の調査では、S X47・63・88の3基の方形周溝墓が確認された。S X47とS X88は南側の辺でS D67に切られ、前後関係を把握しかねるが、遺物からみるかぎり、おそらく同時期に存在していたと考えられる。このうちS X63は確実に陸橋をもつことが確認できたが、ほかの2基については、調査区内では巡っているが、調査区外で陸橋をもつ可能性も考えられる。

S X63は山田分類⁽¹⁾の「中央陸橋型」と呼ばれるものと考えられ、平面形は内側縁は直線的であるが、外側縁は内彎する傾向が指摘されている。当遺跡のS X63はその傾向によく合っているようである。

また、方形周溝墓の開口方向については、津市の位田遺跡の報告書に詳しい⁽²⁾。

ここでは、県下の「中央陸橋型」の開口方向は南東方向と西方向に集中することが指摘されている。そして、周辺のコドノB遺跡（第2次）の調査で検出された弥生時代末から古墳時代初めの方形周溝墓でもやはり、「中央陸橋型」のものは南東か南方向に開口部分をもつことが指摘されている⁽³⁾。

当遺跡のS X63もやはり、南東方向に開口部分をもつものである。コドノ遺跡のほかに明和町の北野遺跡、松阪市瀬干遺跡、明和町金剛坂遺跡（第5次）

の方形周溝墓も南東方向に開口部分を持つものであり、少なくとも、祓川流域に限れば、「中央陸橋型」の方形周溝墓については、南東方向に開口部をもつものが大半であるという西出氏の指摘⁽⁴⁾に抵触しないものと言えよう。

（2）土壘と中世の遺構について

当遺跡の西には、岩内城と呼ばれる中世城館がある。『伊勢国司記略』は、応永年間に北畠満雅が足利氏に対して挙兵した時にこの城へも軍兵を立て籠もらせ、さらに北畠氏の一族が住んで岩内御所と称していたと伝える⁽⁵⁾。応永年間といえば、土壘とS D76とが同時期であり、土壘は両端で調査区外へも延長し、南側には土壘と思われる高まりが現在も残っている。したがって、当遺跡も岩内城となんらかの関わりをもつものとして機能していたのではないかと考えられる。

また、中世の主な遺構には平行して走っているS D3・14・15・31がある。これらとS D76は直行しており、延長して、調査区外でひとつの区画を成していたと思われる。この区画内には、掘立柱建物などの構造物が存在したのであろうが、今回は検出することができなかった。

3 S D11について

調査区南壁で検出された調査区を東西に走る溝であり、調査区中央部で調査区外の南に曲がっていくものと思われる。時期的には土壘とS D76よりは新しいものと思われる。

つまり、先述した岩内城の廃絶後に構築されたもので、その規模から言っても何かを区画するためのものであると考えられる。城堀の地名はこの溝

に拠るものであるかもしれない。

〔註〕

- (1) 山田猛ほか『大鼻遺跡』(三重県埋蔵文化財センター、1994年)。
- (2) 米山浩之ほか『位田遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、1999年)。
- (3) 西出孝『コドノB遺跡(第2次・3次)発掘調査報告—多気郡明和町上村一』(三重県埋蔵文化財センター、2000年)。
- (4) 前掲(3)と同じ。
- (5) 『日本城郭体系 三重・奈良・和歌山』(新人物往来社、1980年)。

番号	登録番号	器種	計測値			調整・釉薬等の特徴		胎土の色調・釉薬	口縁部残存率	出土位置
			口径	底径	器高	内	外			
1	007-01	土師器 壺	17.0			ナデ・ハケメ9本/1cm	櫛書き・刺突・ハケメ4本/1cm	5YR6/6	8/12	SX68
2	027-02	土師器 壺	18.0			ナデ	ナデ・ハケメ5本/1cm	10YR8/3	12/12	SX68
3	036-03	土師器 壺				ナデ・ヨコナデ・オサエ	ヨコナデ・櫛書き・刺突	7.5YR7/4	—	SX47
4	035-01	土師器 壺	13.0	5.5	27.4	ナデ・オサエ・ナデ・ハケメ8~10本/1cm	ヨコナデ・櫛書き・ハケメ9~10本/1cm	10YR7/4	8/12	SX47
5	023-01	土師器 壺			8.5	オサエ・ハケメ6~7本/1cm	ナデ・ハケメ6本/1cm	10YR8/3	—	SX47
6	025-02	土師器 壺	14.9			ナデ・オサエ・ナデ・ハケメ5本/1cm	摩滅のため調整不明瞭	10YR7/3・10YR4/2	12/12	SX63
7	022-02	土師器 壺			6.5	ナデ・工具ナデ	ナデ・ケズリ・ミガキ	7.5YR7/4	—	SX63
8	025-03	土師器 壺	12.5			ヨコナデ	ナデ・ミガキ・ハケメ10本/1cm	7.5YR7/4・6/4	10/12	SX63
9	024-01	土師器 壺	11.6	6.5	23.5	ヨコナデ・工具ナデ・オサエ	ヨコナデ・刺突・ミガキ・ハケメ6本/1cm	5YR7/6	12/12	SX63
10	035-02	土師器 高杯	9.0	8.4	10.3	ナデ・ヨコナデ・ミガキ	ミガキ・三方に透かし孔	10YR6/4	1/12	SX63
11	011-01	土師器 高杯	15.0			ヨコナデ・工具ナデ・オサエ・ハケメ7本/1cm	ナデ・ヨコナデ・ハケメ4本/1cm・四方に透かし孔	10YR5/2	—	SH52
12	022-01	土師器 甕	14.5		18.1	ナデ・ハケメ5本/1cm	ナデ・ハケメ5本/1cm	10YR7/4	4/12	SK30
13	018-03	土師器 壺	—			ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ	2.5YR6/2	—	SK30
14	018-01	土師器 杯身	12.6		4.1	ロクロナデ	ロクロナデ・ロクロケズリ	10YR7/1	12/12	SK30
15	017-02	土師器 甕	13.0		10.6	ヨコナデ・ケズリ・ナデ	ヨコナデ・ハケメ6本/1cm・底部にヘラ記号	10YR5/3・2.5YR8/3	1/12	SK40
16	026-01	土師器 甕	13.0			ヨコナデ・ハケメ5本/1cm	ヨコナデ・ハケメ5本/1cm	10YR7/4	12/12	SK40
17	017-05	土師器 杯	—			ナデ	オサエ	10YR7/3	—	SK40
18	011-02	土師器 杯	13.2	4.0	3.5	ヨコナデ・ナデ・スス付着	ヨコナデ・ナデ・スス付着・粘土接合痕あり	10YR7/4	12/12	SK48
19	016-06	土師器 杯	11.6			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・オサエ	10YR5/2	6/12	SK53
20	016-08	土師器 土錐	長4.4短1.0重3.8g				ナデ	5YR6/6・7.5YR5/2	—	SK58
21	016-07	土師器 土錐	長5.8短1.3重7.5g				ナデ	10YR6/2	—	SK58
22	016-01	土師器 杯	11.2	3.2	5.2	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ケズリ	10YR7/3・6/3	8/12	SK58
23	015-03	土師器 皿	19.5	18.0	2.3	ヨコナデ・ヘラ記号・暗文あり	ヨコナデ・ナデ	5YR7/6	2/12	SK58
24	026-02	土師器 杯	13.5	5.0	5.7	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	10YR6/2	2/12	SH45
25	015-02	土師器 甕				ヨコナデ・ハケメ6本/1cm	ヨコナデ・ハケメ4~5本/1cm	7.5YR6/6・5YR6/6	1/12	SH45
26	029-01	土師器 甕	15.0			ヨコナデ・工具ナデ	ヨコナデ・オサエ後ナデ	10YR7/4・6/3	3/12	SH45
27	015-01	土師器 甕	16.0			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・ハケメ7~8本/1cm	7.5YR7/4	2/12	SH45
28	008-01	土師器 甕	21.0			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・オサエ後ナデ・ハケメ7~8本/1cm	7.5YR7/4	3/12	SH62
29	035-03	土師器 皿	16.3		2.4	ヨコナデ・摩滅のため調整不明	ヨコナデ・摩滅のため調整不明	7.5YR6/4	2/12	SH62
30	036-02	土師器 土錐	長4.3短1.2重4.8g				ナデ	2.5Y7/3・6/2・5/1	—	SH62
31	036-01	土師器 土錐	長4.2短1.3重4.3g				ナデ	2.5Y4/1	—	SH62
32	031-01	土師器 甕	16.0	6.0	19.0	ヨコナデ・工具ナデ	ヨコナデ・ナデ	10YR7/3・6/2・5/2	4/12	SH59
33	004-03	陶器 皿	8.7	6.0	1.5	ロクロナデ・自然釉	ロクロナデ・底部糸切り	2.5Y7/2	3/12	SK2
34	004-04	陶器 梶	17.0	7.9	5.3	ロクロナデ	ロクロナデ・高台貼り付け・底部糸切り	2.5Y8/1・8/2	1/12	SD3
35	005-05	土師器 皿	10.0	3.8	1.4	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・オサエ	7.5YR8/4	2/12	SD14
36	018-02	陶器 梶				7.2 ロクロナデ・自然釉	ロクロナデ・高台貼り付け後ナデ	2.5Y7/2	—	SD31
37	018-04	磁器 梶	10.8	3.6	3.0	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y8/2	4/12	SX9
38	018-05	土師器 皿	14.7		2.9	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・オサエ	7.5YR8/4	12/12	SX9
39	018-06	土師器 皿	14.7		2.9	ヨコナデ・ナデ・オサエ	ヨコナデ・ナデ・オサエ	10YR7/4・5YR6/6	6/12	SX9
40	019-03	土師器 皿	8.9		1.4	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・オサエ	7.5YR7/6	8/12	SX9
41	019-07	土師器 皿	8.7		1.5	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・オサエ	7.5YR7/6	12/12	SX9
42	019-01	土師器 皿	8.5		1.4	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・オサエ	7.5YR7/6	9/12	SX9
43	019-04	土師器 皿	8.7		1.5	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・オサエ	10YR7/4	9/12	SX9
44	019-06	土師器 皿	8.6		1.6	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・オサエ	10YR7/4	11/12	SX9
45	019-02	土師器 皿	8.2		1.2	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・オサエ	7.5YR7/6	4/12	SZ65
46	016-05	土師器 皿	8.8		1.5	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・オサエ	10YR7/4	8/12	SZ65
47	016-03	土師器 皿	9.0		1.5	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・オサエ	10YR7/4	4/12	SZ65
48	016-04	土師器 皿	8.4		1.2	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	7.5YR8/4・4/3	11/12	SZ65
49	033-05	土師器 皿	7.6		1.2	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	10YR8/4	8/12	SX74
50	034-02	土師器 皿	8.2		1.3	ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	10YR7/4	12/12	SX74
51	019-05	土師器 皿	7.6		1.2	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	10YR8/2	8/12	SX74
52	034-04	土師器 皿	7.7		1.4	ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	10YR8/4	12/12	SX74
53	034-01	土師器 皿	—		—	ナデ	ナデ	10YR7/3	0/12	SX74
54	033-06	土師器 皿	7.6		1.2	ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	10YR8/3	11/12	SX74

第1表 出土遺物観察表（1）

番号	登録番号	器種	計測値			調整・釉薬等の特徴		胎土の色調・釉薬	口縁部残存率	出土位置	
			口径	底径	器高	内	外				
55	034-05	土師器	皿	8.2	1.3	ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	10YR8/4	3/12	SX74	
56	034-03	土師器	皿	8.1	1.3	ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	10YR8/1	12/12	SX74	
57	033-04	土師器	皿	12.9	2.5	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・オサエ	10YR8/4	12/12	SX74	
58	033-03	土師器	皿	12.5	2.5	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・オサエ	10YR8/4	12/12	SX74	
59	014-02	無釉陶器	椀	15.2	7.9	5.1	ロクロナデ	ロクロナデ・高台貼り付け・底部糸切り・モミガラ痕	2.5Y7/3	1/12	SD76
60	014-05	無釉陶器	椀	17.6			ロクロナデ		2.5Y7/2	12/12	SD76
61	014-01	無釉陶器	椀		7.9		ロクロナデ	ロクロナデ・高台貼り付け・底部糸切り・モミガラ痕	2.5Y7/1	—	SD76
62	014-03	無釉陶器	椀		8.2		ロクロナデ・自然釉	ロクロナデ・高台貼り付け・底部糸切り・モミガラ痕	2.5Y7/3	—	SD76
63	014-04	磁器	椀	17.2			ロクロナデ	ロクロナデ		1/12	SD76
64	013-03	土師器	皿	12.4			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	10YR8/4	3/12	SD76
65	012-03	土師器	皿	15.2	2.1		ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・オサエ	7.5YR7/6	6/12	SD76
66	012-04	土師器	皿	8.0	1.3		ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・オサエ	10YR7/4	9/12	SD76
67	013-04	土師器	皿	8.0	1.3		ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・オサエ	7.5YR7/4	9/12	SD76
68	020-01	陶器	擂鉢	29.5	10.6	10.9	ロクロナデ・スリメ4本/1cm	ロクロナデ・底部糸切り	鉄釉・鋳釉	1/12	SD11
69	020-06	陶器	天目茶椀	12.1			ロクロナデ	ロクロナデ	鉄釉	3/12	SD11
70	020-05	陶器	天目茶椀	12.6			ロクロナデ	ロクロナデ	鉄釉	2/12	SD11
71	021-02	陶器	甕				ロクロナデ	ロクロナデ	焼き締め	0/12	SD11
72	021-05	土師器	土錐	長5.3短2.1 重19.4 g				ナデ	10YR8/3・ N4/10	—	S D11
73	032-01	土師器	鍋	27.3	26.8		ヨコナデ・工具ナデ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ・ハケメ9本/1cm	7.5YR7/4	3/12	S D11
74	028-01	土師器	鍋	32.0			ヨコナデ・オサエ・ハケメわずかに残る・工具ナデ	ヨコナデ・オサエ・ナデ・ケズリ・ハケメ6~7本/1cm	7.5YR7/2・6/2	3/12	S D11
75	017-01	土師器	鍋	19.7		11.1	ヨコナデ・ハケ後ナデ・ケズリ	ヨコナデ・オサエ後ナデ・ハケメ8本/1cm	10YR7/3・ 2.5Y5/2	8/12	S K51
76	017-03	土師器	皿	11.4	2.6		ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・オサエ	2.5Y7/3	12/12	S K51
77	017-04	土師器	皿	12.0	3.0		ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・オサエ・ナデ	7.5YR7/4・8/4	12/12	S K51
78	033-01	土師器	鍋	18.8		10.6	ヨコナデ・ナデ・工具ナデ	ヨコナデ・ナデ・オサエ・工具ナデ	10YR7/4	10/12	S K56
79	001-01	土師器	台付椀		11.0		ロクロナデ	ロクロナデ・自然釉	2.5Y7/3・ 10YR6/3	—	表土
80	005-01	土師器	甕	16.0			ヨコナデ・工具あたり痕・ケズリ	ヨコナデ・ハケメ5~6本/1cm	10YR8/3・ 7.5YR8/3	3/12	包含層
81	005-02	土師器	杯	13.0		5.5	ヨコナデ・工具ナデ	ヨコナデ・オサエ・ナデ	10YR7/3・ N4/0	2/12	包含層
82	001-04	無釉陶器	椀		7.5		ロクロナデ	ロクロナデ・高台貼り付け後ナデ・底部糸切り・モミガラ痕	2.5Y6/2	—	包含層
83	020-02	無釉陶器	椀	15.9	7.5	5.9	ロクロナデ	ロクロナデ・高台貼り付け後ナデ・底部糸切り	10YR7/4・ 7/3	6/12	表土
84	004-02	無釉陶器	椀	15.5	8.7	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ・高台貼り付け後ナデ・底部糸切り・モミガラ痕	2.5Y8/2	3/12	包含層
85	001-02	無釉陶器	椀	15.0	7.2	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ・高台貼り付け後ナデ・底部糸切り	2.5Y6/2	2/12	包含層
86	002-01	無釉陶器	椀		8.0		ロクロナデ・自然釉	ロクロナデ・高台貼り付け後ナデ・底部糸切り	10YR6/3	—	包含層
87	001-03	無釉陶器	椀		7.8		ロクロナデ	ロクロナデ・高台貼り付け後ナデ・底部糸切り後ナデ	2.5Y7/3	—	包含層
88	020-04	無釉陶器	椀		7.4		ロクロナデ	ロクロナデ・高台貼り付け後ナデ・底部糸切り	2.5Y7/2	—	包含層
89	001-05	無釉陶器	皿	9.5	4.0	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ・底部糸切り	2.5Y6/2	3/12	包含層
90	002-03	土師器	皿	13.0		2.4	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・オサエ・ナデ	10YR7/4	9/12	包含層
91	005-03	土師器	皿	8.0		1.4	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・オサエ・ナデ	7.5YR7/6・7/4	3/12	包含層
92	020-03	土師器	皿	8.8		1.4	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・オサエ・ナデ	10YR7/4・N3/0	12/12	包含層
93	002-02	土師器	皿	8.5		1.5	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・オサエ・ナデ	10YR7/4	9/12	包含層
94	005-04	土師器	皿	13.0		2.4	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・オサエ・ナデ	7.5YR7/4・ 10YR8/3	6/12	包含層
95	003-02	土師器	鍋	24.0			ナデ	ナデ・オサエ	10YR7/4	3/12	包含層
96	010-01	土師器	鍋	11.2		10.7	ヨコナデ・工具ナデ	ヨコナデ・ハケメ5本/1cm・ケズリ・ナデ	5YR6/4	4/12	試掘
97	006-06	土師器	土錐	長4.7短2.1重4.8 g				ナデ	10YR7/3・ 2.5YN6/1	—	包含層
98	006-05	土師器	土錐	長2.9短1.1重2.4 g				ナデ	10YR8/3	—	包含層
99	006-07	土師器	土錐	長3.5短1.1重2.7 g				ナデ	10YR8/4	—	包含層
100	006-04	土師器	土錐	長4.7短1.2重4.8 g				ナデ	7.5YR7/6・ 5YR7/6	—	包含層
101	002-05	鉄器	不明							—	包含層

第2表 出土遺物観察表（2）



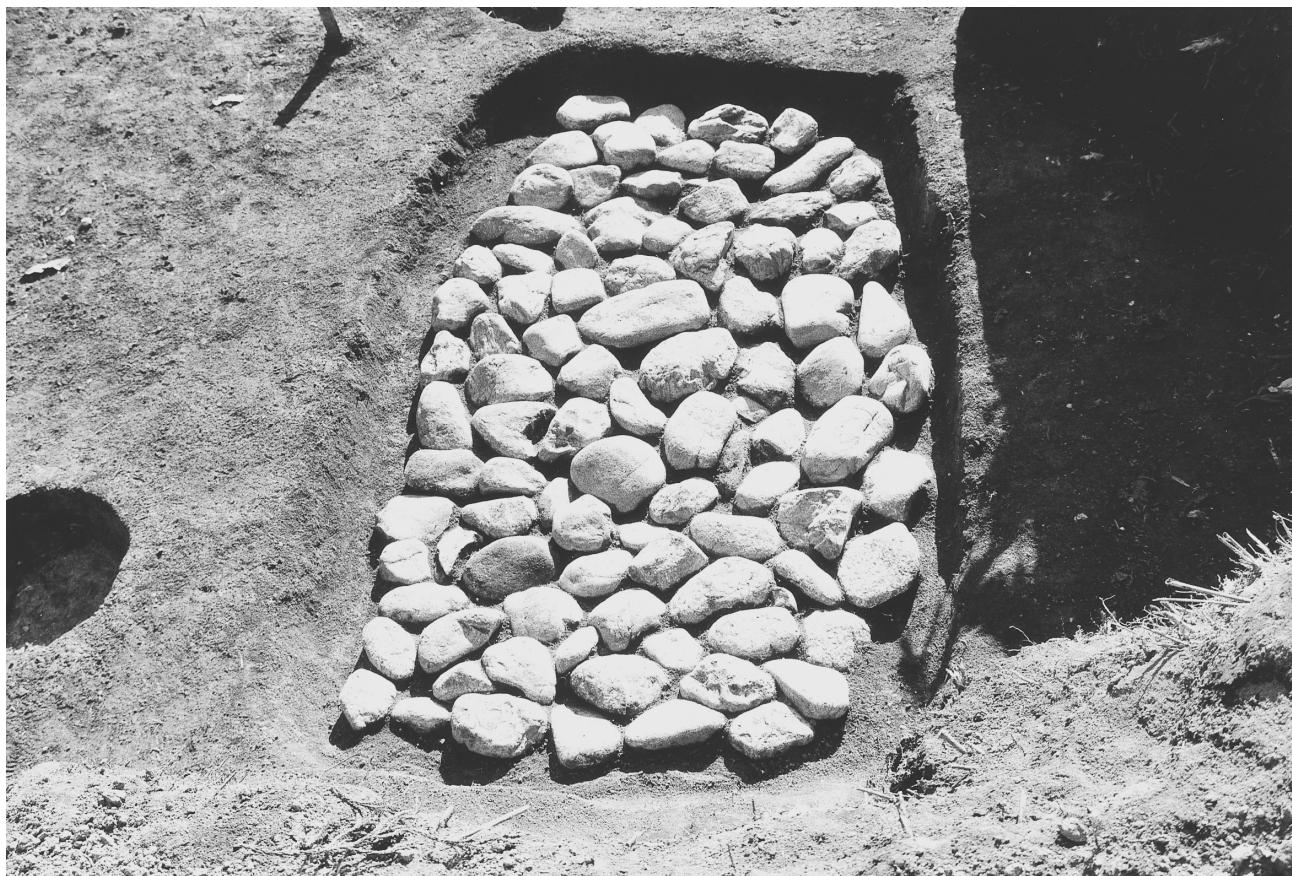
遺跡全景 東から



遺跡全景 西から



土塁の下の遺構全景 北から



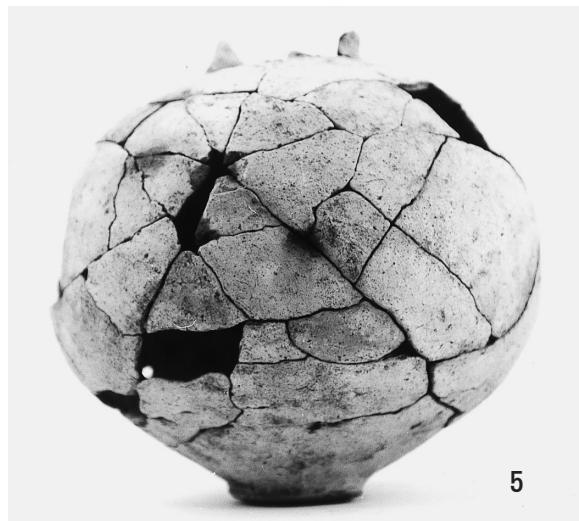
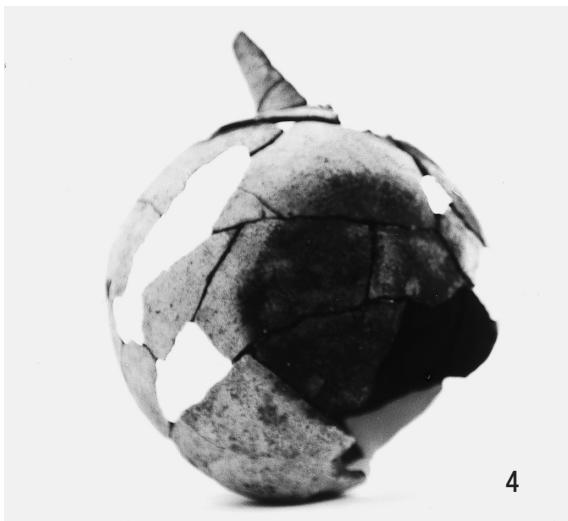
S Z 6 5 東から



S H 5 2 土器出土状況 北から



S X 9 土器出土状況 北から



出土遺物写真（1）（縮尺不同）



出土遺物写真（2）

報告書抄録

ふりがな	じょっぱりいせきはっくつちょうさほうこく							
書名	城堀遺跡発掘調査報告							
副書名								
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	239							
編著者名	金子 智子							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川 503 TEL0596-52-1732							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
じょっぱり 城堀 遺跡	みえけんたきぐん 三重県多気郡 めいわちょううえむら 明和町上村	市町村 24- 442	遺跡番号 170	34° 31' 30"	136° 35' 50"	19991004 ～ 20000126	2,000	(一)多気停車場斎明線緊急地方道路整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
城堀 遺跡	集落	古墳時代前期 奈良時代 鎌倉時代～室町時代 戦国時代		方形周溝墓 竪穴住居 溝 土坑 土壙		土師器 中世陶器・土器 土錘		城館跡

三重県埋蔵文化財調査報告239

城堀遺跡発掘調査報告

2003・3

編集 三重県埋蔵文化財センター
発行

印刷 共栄堂印刷株式会社